

堀櫟山・市郎父子に関する新知見

——展覧会開催後の調査より——

西島太郎

はじめに

本稿は、松江歴史館で開催された平成二四年企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。——野口英世の親友 堀市郎とその父櫟山——」の開催中および閉会后に明らかとなった、堀櫟山（宗太郎）・市郎父子に関する新知見を記録し考察を加えることで、今後、堀櫟山・市郎父子研究の素材の提供を目的とする。展覧会は二〇二二年（平成二四）三月二〇日から五月六日まで松江歴史館企画展示室で開催された。開催の経緯については、別稿「平成24年企画展「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析」〔『松江歴史館研究紀要』三〕を参照されたい。開催期間中から、観覧者からの指摘や、西島の調査により、新たな事実が確認され、四月一九日には、新たに判明した新渡戸稲造、後藤新平、アレクシス・カレル、原田武一、秦佐八郎、斎藤博の六名の写真を追加公開した。展覧会終了後も、地元における新資料の発見や、一二月の東京における日本カメヲ博物館での展覧会に合わせ明らかになった事実もある。松江と東京で展覧会が開催され、人々に知らせることができたというだけでなく、展覧会開催による効果で、新たな発見へと結びついたものも多くあった。

企画展に合わせ、図録『松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。——野口英世の親友 堀市郎とその父櫟山——』（松江歴史館編・刊。以下「図録」と略称する）、および拙著『野口英世の親友 堀市郎とその父櫟山——旧松江藩士の明治・大正時代——』（ハーベスト出版、いずれも二〇二二年三月二〇日刊）が刊行された。本稿は、両書刊行後に確認された新知見を記す。

一 堀櫟山に関する新知見

【1】奥原国雄「堀櫟山と方円学舎」〔『島根新聞』昭和四五年十一月六日付七面、傍線西島注〕

12歳で宝物展出陳

明治十七年（一八八四）に、私立画学校方円学舎を創設して、松江に洋画をひろめた堀櫟山（宗太郎）は、安政三年（一八五六）正月十一日、松江藩士堀良蔵の長男として、松江市外中原町に生まれた。

文久三年二月より、外中原町、高木文四郎について四書を読み、元治元年四月より明治六年一月まで満八年十カ月間、祖父堀市郎右衛門について和画を修業し、その後支那南北派諸家の筆意を学んだ。明治

二年八月より十二月まで、仏国人アレキサンドルにつき、綴字書及びフランス文典を学び、明治六年五月より同十八年八月に至る間、黒田村香西藤右衛門について国学を修業、明治十六年（一八八三）二月より十二月まで九カ月間小豆沢碧湖（亮二）につき洋画を修めた。ちょうどこの頃小豆沢碧湖は東京から帰松していたらしく、森本香谷は、明治十五年一月から十七年十一月まで、碧湖について鉛筆画、水彩画、油絵を修業している。

明治十七年（一八八四）十一月十七日、私立画学校方円学舎を開設し、明治十八年十一月二十四日島根県師範学校兼島根県第一中学校雇を申し付けられ、月給金五円の支給を受けたが、十九年七月十九日依願解雇となった。また明治三十五年七月十七日から十月三十一日まで島根県立農林学校の教務補助雇（日給金五拾銭）を勤めた。

櫛山の作品としては、阿羅波比神社所蔵の「外中原八幡宮御的式の図」がある。これは着色紙本横物で、慶応三年秋八月十四日この式に列して写したものである。これは櫛山十二歳の作で、昭和四十一年県立博物館の島根の神社宝物展に出陳された。なお中原八幡宮の由来や御的式のことには「松江八百八町内物語」末次の巻（一三一頁）に明らかである。

県知事から褒状

次に明治十七年四月開催の第二回絵画共進会に出品しているが、画題は不明である。この時は出品心得のため、県勸業課により第一回共進会（明治十五年）の審査報告書を下付され、第二回共進会については郡より出品人略譜を、県より審査報告書に下付されたほか、その出品は篤志の至りと、島根県令藤川為親より賞詞を受けた。

明治二十二年五月三十一日島根県私立教育界教育品展覧会に出品の鷹図に対し四等賞（商品半紙一束）、地文教授用具に対し五等賞を受けた。

明治二十三年内国勸業博覧会に着色紙本楊柳観音及び花鳥図二点の日本画と、龍頭滝の油絵を出品した、この油絵は滝水に虹の映ずるところ、釣り人を配した図であったという。

明治三十年四月神戸市に開催の第二回内国水産博覧会に、島根県外海水産業組合連合会議所より出品の「島根県水産誌」のために、重要魚類百余種を写生した。この水産誌は有功三等章を受けたので連合会議所長恒松隆慶より謝状をおくられた、この写生図は後に県の水産学校に寄贈されたようである。

明治三十四年八月、第一回島根県物産共進会に、淡彩月下芦雁図を出品し、島根県知事金尾稜巖より褒状を受けた。

わずか数点が現存

これらの作品は、現在ほとんどその所在は不明であるが、堀家に現存するものとしては次の如きものがある。

出雲大社真景油絵Ⅱこれは永く県の商品陳列所に掲揚されていたことがあり、昭和四十五年開催の県立博物館の島根の故人洋画展に出陳された。作年代は詳らかでない。

父良藏肖像油絵Ⅱこれは父良藏の還暦を記念して描いたもので明治二十一年の作である。

そのほか浜佐田村、（釜脱）代神社の正月行事絵巻下絵、明治三十四年松江火災遠望図及び松江城山図の下絵、鉛筆練習肖像画などが残っている。

なお松江神社には、松に鷹図硝子絵が蔵されている。作年代は不祥である。

櫛山はまた音曲をよくし、胡弓、尺八を得意とし、和歌俳句をたしなむなど極めて多趣味な人であった。

明治四十二年三月三十一日、五十四歳でもって没した。

長男・市郎

櫛山の長男市郎は、明治十二年四月十三日生まれで、美術研究のため明治三十四年米国に渡った。

ブラドリーに写真術を学び、その技は師を凌ぐものがあるといわれ、また洋画家としてもたびたび展覧会に入選した。ダンサーを主題とした芸術写真はアメリカ人を驚かしニューヨークの人気男となったという。大正十五年秋、その芸術写真百余点を名古屋陶器重役森村茂樹氏に送り来たり展覧会を開いた。

在米二十八年、昭和四年八月帰国して東京、のち横浜に住んだ。帰国後もたびたび渡米し、また欧州にも遊んだ。パリで写生した風景油絵が残っている。ニューヨークで同じアパートに住んでいた関係から野口英世と親交があり、野口記念館の理事も勤めた。松江にもたびたび帰って来たが、昭和四十四年一月三十一日横浜の自宅で没した。生涯独身であった。

方円学舎の開放

堀櫛山創設の私立画学校方円学舎については、まず設置伺書を明治十七年九月二十六日付をもって島根郡第三学区及び第四学区学務委員を経て県に提出し、同年十一月十日をもって、島根県令藤川為親代理島根県代書記官妻木狷介より、書面伺之趣聞届候事と認可された。但

し付箋の条項改正、さらに開申すべしとあって、これが開申書を十一月十七日提出してよいよ開校の運びとなったのである。

今その伺書について方円学舎の概要を見るに次の如くである。

設置の目的は、画学を授けて学術工芸の智能を助け、兼ねて爽快の心を興起するにありとし、入学資格は、小学校三力年以上の課程を卒えた有志者とした。

名所は方円学舎、位置は松江市西茶町六番地というから、現在の水明荘旅館の西隣あたりだったと思われる。湖岸から五、六間引つ込んだ所に建てられた三間に三間（九坪）の二階家で、階下は家主の住居で、その階上を借用した。二階は東と西が全部土壁で、北と南にそれぞれ二間の窓がついており、中央に敷居があつて東西の二室に仕切られ、東室は押し入れがあつて六畳、これを第一教場とし、西室には昇降階段があつて八畳、これを第二教場とした。南の窓からは畑をへだてて宍道湖がながめられたことと思われる。

授業日数は火土の週三日と決めてあるが、出席簿を見ると週四日、月十数日となつている。授業時間は、午前九時から午後四時まで六時間、学科課程は第一年、第二年は鉛筆画、第三年を和画とした。鉛筆画教授の要旨は、まず執筆、運筆の法を習わしめ、次に自在画をもって諸般の法則を口授してこれを描かしめ、ようやく進んで自在画をもって種々の実物を臨写させ、光線陰影の布置等よくその度に適し、描技真に迫り文章の尽す能わざるところを補なうに至らんことを期した。そして第一年には、直線、曲線及びその単形より始め、漸次紋画、器具、花葉、書置く、艸木、禽獸、虫魚等に及び、第二年には山水、人物、及ぶこととし、第三年の和画においては、墨面の草木、花卉等

より始め、漸次山水、虫魚、禽獸に及び、進んで設色の山水、人物を
描かせることとした。

補助教員に実弟

授業料は一カ月拾五銭で、校長兼教員としては、当時二十九歳の櫛
山がこれにあたり、補助教員として櫛山の実弟三谷鍊次郎（三十二
十歳）がこれを助けた、鍊次郎は慶応元年六月生まれ、飯石郡赤名村
の三谷氏を継いだ人で、明治十四年五月外中原小学校上等科卒業、そ
の際県より、行状正しく他の標準ともなるのかどで中折一束を賞与
された、鍊次郎は明治十三年八月より十四年五月まで十カ月間、松江
中学校教員遠藤藤蔵に、十七年四月より七月まで四カ月間堀宗太郎に
ついて洋画を修業した。

生徒数は、明治十八年（一月—十二月）の出席簿に名をつらねた者
九十八人であるが、欠席者もあり年間平均月十五人くらいであった。

生徒の姓名だけではどんな人達が通学したかわからぬが、八月の出席
簿には近郡の小学校教員の名前が数人見える。

方円学舎がいつ頃まで続いたか、その後の状況は群らかでないが、
明治二十五年松江に出た石橋和訓も櫛山の門に入りましたというから、
その頃まで続いていたことと思われる。（松江市石橋町）

右の新聞記事から得られる新知見は以下の点である。①阿羅波比神社所蔵
「外中原八幡宮御式的図」が、昭和四一年県立博物館の島根の神社宝物展
に出陳された。②明治三〇年四月の第二回内国水産博覧会で、島根県外海水
産業組合連合会議所が出品し、堀櫛山が重要魚類百余種を写生した「島根県
水産誌」が、「後に県の水産学校に寄贈されたようである」とする。「島根県

水産誌」の正式名は「島根県重要水族誌」である。この水族誌は、堀市郎の
姪の佐々木節子氏によれば、後に皇室へ献上となったとしており、この新聞
記事とは違う内容となっている。因みに西島が、県の水産学校である島根県
隠岐水産高等学校に問い合わせたところ、古い史料は所蔵していないとの返
答であった。事実の誤認か、水族誌の下書きの可能性がある。③現在、島根
県立美術館に寄託保管されている「出雲大社真景油絵」が、長い間、島根県
県の「商品陳列所」に掲揚されていた点である。「商品陳列所」の正式名は「島
根県物産陳列所」で、明治一三年に旧県庁舎を改造して開設され、現在の島
根県民開館の場所であり、昭和一五年に閉鎖された。その後、昭和四五年開
催の島根県立博物館の「島根の故人洋画展」に出陳されたことも判る。④松
江神社にあるという「松に鷹図硝子絵」は、現在、社務所に掲げてある（城
西公民館から教示を得た）。硝子絵ではない。「奉納」「以御手植古松造之」「明
治三十三年十月十五日 願主 松江市殿町 川津佐太郎」、画中右下に「画工
堀宗太郎（朱筆で花押）」とあり、藩主手植えの古木に描いたものである。

奥原国雄氏は、『八束郡誌』を編纂した奥村碧雲の次男であり、京都繊維大
学教授を経て、島根県の蚕糸課長・蚕業試験場長を勤めた人物で、その経歴
は国雄氏著作の『美しき工芸技術——島根の風土が生んだもの——』（島根県
文化財愛護協会、一九七〇年）に寄稿した石塚尊俊氏の跋文に詳しい。奥原
氏は、松江に残る堀家の史料を参考に執筆されたと思われる。また堀市郎に
関する記事は、大正一四年一月一七日付『山陰新聞』（三面。今の「山陰中
央新報」に掲載された記事「アメリカ人を驚かした／ダンサーの芸術写真／
紐育の人気男堀さん（松江出身）の傑作／三都で鑑賞展覧会を開く」も参考
にしたと思われる、「ニューヨークの人気男」という表現を踏襲している。また
奥原氏が堀家二代について記事にしたのは、掲載年に堀市郎が没しているこ

とから、追悼記事の意味合いもあるものと考えられる。

【2】方圓学舎の生徒柴田覚次郎の履歴

展覧会の開催期間中に、柴田覚次郎氏の孫にあたる柴田久美子氏（松江市北堀町）から、覚次郎の履歴書の控があることの教示を得た。覚次郎は拙著『野口英世の親友・堀市郎とその父樺山』九〇頁）でも触れた通り、樺山が明治一七年に開校した方圓学舎最初の生徒であり、もつとも熱心に出席して、試験も受け合格を果たした人物で、その履歴は『島根鳥取名士列伝』（一九〇六年）にも掲載されている。この度見つかった履歴書控は、さらに詳しい事績を明らかにできる点で貴重であるため左に翻刻する。履歴書は、野線のある和紙を紙縫綴で綴じた全八丁のものである（傍線西島）。

履歴書

島根県出雲国能義郡東母里村式番地

「(ミ)セケチ」平民「柴田莊吉弟

柴田覚次郎

慶応三丁卯八月十日生

学業

- 一 明治七年三月二日公立母里小学校ニ入り、同十年十一月廿一日下等教科卒業、同十二年十一月二十一日小学全科卒業、
- 一同十二年十二月ヨリ能義郡西母里村寄留海野典之ニ就キ、支那学脩業、用書、十八史略、国史略、小学国語、春秋左氏伝等、
- 一同一七年三月ヨリ松江外中原中ノ町河合篤敬ニ就キ支那学脩業、用書、

堀樺山・市郎父子に関する新知見（西島）

控

皇朝史略、通鑑肇要、文章軌範、論語、孟子等、

一同年五月ヨリ松江雜賀町中溝利一郎ニ就キ、珠算、筆算脩業、

一同年同月ヨリ松江材木町小村銀之助ニ就キ、画学脩業、

賞罰

一 明治十年十二月廿一日下等小学教科卒業候ニ付、脩身論志部御賞与相

成候、

一同十三年三月廿二日小学全科卒業候ニ付、為書籍料金七拾五錢御賞与

相成候、

右之通有之候也、

右

明治十七年八月 柴田覚次郎

(一丁空)

一 九月八日当師範学校ニ入校、

一 八月二十八日ヨリ九月二日マテ入校試験、

一 平民

一 能義郡東母里村式番邸柴田莊吉弟、

一 慶応三年八月十日生、

一 入校之節、十七年「■」式ケ月

一 「(ミ)セケチ」松江外中原河合「能義郡東母里村式番屋敷

一 保証人「(挿入) 意字郡八軒屋町」岡武市、但他人、

一 明治七年三月二日公立母里小学校入学

一同十年十一月廿一日下等科卒業、同十二年十一月二十一日日小学全科

卒業、

明治十七年九月四日

柴田覚次郎

(余白)

証

一真鍮帽章

壹個

右御貸渡シニ相成リ、正ニ借用仕候、万一毀損或ハ紛失致シ候節ハ、御指揮ニ随ヒ、速ニ償還可仕候、依而証書差出置キ候也、

島根県師範学校第六級生

明治十八年 月 日 柴田覚次郎

島根県師範学校御中

(余白)

御請書

第四伍長 柴田覚次郎

右謹テ御請仕候也、

明治十八年六月

師範校高等五級生

柴田覚次郎

島根県師範学校御中

(余白)

御請書

旧高第四級生

柴田覚次郎

右第三年級へ編入候事、

明治十九年七月三十一日

島根県師範学校

右謹テ御請仕候也、

野義郡東母里村二番地

莊吉弟

明治十九年八月二日 柴田覚次郎

島根県師範学校御中

(余白)

欠席御届

私儀病氣ニ付キ出校難相成候ニ付、「(ミセケチ)病氣」全快迄欠席仕度、此段診断書相添御届申上候也、

明治十八年九月廿九日

島根県能義郡東母里村式番屋敷

莊吉弟

三年生 柴田覚次郎

島根県尋常師範学校御中

(余白)

診断書

島根県能義郡東母里村式番屋敷

莊吉弟

柴田覚次郎

慶応三年八月生

一 体質 中等

一 病名 腸間膜閉塞

一 原因 腸加答兒 (腸カタル)

一 病症 身体不安時ニ体温ノ罷降アリ、下腸及足部ニ浮腫ヲ生シ、食欲欠缺、便秘ヲ来タシ、依テ歩行スルコト能ハス、

一 経過 明治十九年九月廿三日ヨリ症候前条ノ如シ、
一 治方 実多利斯海葱舍利別ノ同剂、其他健胃□及下剂等ヲ投ス、
一 予□ 追日善良ナラン、

能義郡大塚町五拾三番地

明治十九年九月廿九日

大森益太郎

(了)

右履歴書控で注目される点は、明治一七年五月から覚次郎が松江市材木町の小村銀之助に「画学」を学んでいる点である。覚次郎にとって、この年は忙しく、三月に外中原の河合篤敬に就き「支那学」を学び、五月からは画学と共に、雑賀町の中溝利一郎について「珠算」を学んでいる。八月に師範学校の試験を受け、九月に入学、そして一二月に師範学校に通いながら、堀櫛山が西茶町に開校した画学校である方圓学舎にも入学し学ぶ。覚次郎が学んだ材木町の小村銀之助の画学は、おそらく日本画と思われるが、明治一七年当時、松江に画学を教える人物がいたことが特筆される。なお方圓学舎では、鉛筆画と日本画を教えたので、覚次郎は自らの画に対する視野をさらに広げる目的で入学したものと考えられる。また明治一九年に能義郡大塚の医者大森益次郎の診断書をもって休学届を出しているのは、この年、能義郡母里村の生家が洪水で流され、親族溺死により柴田家を継がなければならなかったからで、病気を理由に師範学校を休学したことが判る。

【3】「雇教員」堀宗太郎

明治一八年一月から翌年七月まで、堀宗太郎は島根県師範学校、及び県第一中学校雇となる。明治四四年九月に編纂された『島根県師範学校一覽』（内田融氏教示による。なお同書の堀宗太郎覧の雇教員の始期を「明治）一

八・一二・二四」とあるのは、宗太郎の「日記」から、「(明治)一八・一一・二四」とすべきであるところの誤記である。また金子一夫『近代日本美術教育の研究―明治時代―』中央公論美術出版、一九九二年、六四九頁所載「島根県画教員」の宗太郎の島根県師範学校在任の始期を、明治一八年七月としているのは「十一」を「七」と誤読している。)によれば、宗太郎は「雇教員」と記されている。この当時、他の教員には一等教諭や三等教諭、三等助教諭、教諭助手、助教諭試補などあり、雇教員もその一つである。「雇教員」とあるように、宗太郎の立場はあくまでも臨時のものであったことが判る。宗太郎は正式な「教諭」資格をもっていなかったことを示すと共に、宗太郎の「日記」からは、代用教員のような形でしか教えていないので、ここでの「雇教員」とは、事務仕事も多くこなす代用教員のような存在だったものと考えられる。

【4】堀櫛山画作品の所在

堀宗太郎の作品でまだ確認しえていないものを記す。

①内田英氏が執筆した『法吉村誌』（私家版、一九八八年、二九頁）に、「甲午年 早春応需内田氏画之 櫛山」と記された宗太郎筆の「茶摘みと伝習場」の写真を載せる（岡崎雄二郎氏の教示）。明治二七年に内田氏の求めに応じて宗太郎が描いたものである。②宗太郎画「陣幕久五郎像」は東出雲町の展覧会で出品されていたという（安部吉弘氏の教示）。

二 堀市郎に関する新知見

【1】堀市郎出身小学校は内中原小学校

『内中原教育 その百年の歩み』(内中原教育 その百年の歩み 編集専門委員会編、内中原小学校校舎改築記念事業実行委員会刊、一九七九年)の「内中原小学校卒業生名簿」の「明治二十二年三月卒業生」に「堀市郎(中)」とある。「中」は中原の意味で居住区を指す。この記事が正しいとすると、これまで日米協会の調査において明治二三年に「尋常小学校」を卒業したとあるのは、一年繰り上げなければならない。また同調査での「尋常小学校」は内中原小学校の事であることも判明する。明治二二年に松江市制の実施に伴い小学校は松江市管理となった。内中原小学校も、それまでの「島根郡第三番学区内中原尋常小学校」から、「島根県松江市内中原尋常小学校」と改称された(同書「内中原小学校沿革年表」による)。この他、「内中原小学校卒業生名簿」の「明治二十七年三月卒業生」の項には「堀キクコ(中)」とあり、市郎の妹キクコの名もある(登久子の姉)。

二〇一二年九月二七日、内中原小学校に右卒業名簿を調査した(三代喜政校長の案内)。この名簿は、明治二十二年三月から同四〇年三月までの内中原小学校の卒業生の名を記した名簿で、その表紙は、「明治二十一年三月起 卒業生名簿 内中原尋常小学校」(縦24・5×横17・0cm。冊子。松江市立内中原小学校所蔵)とある。この中の「卒業生徒名簿」欄に、「堀市郎 ■■■(黒塗り、恐らく「士族」) 中原 明治十二年四月十三日 (明治二十二年三月) 五十 実業」とある。この各欄の読み方は、①「堀市郎」は氏名、②「■■■」は黒塗りで恐らく「士族」と書かれていたものと考えられる。③「中原」

は住所、④「明治十二年四月十三日」は生年月日、⑤の空欄は、その頁の最初には「明治二十二年三月」とあり、卒業年月を指す。⑥「五十」は内中原小学校卒業生五〇人目、⑦「実業」とあるのは後筆で、卒業後の進路を示している。

この卒業名簿から、堀市郎が卒業した小学校が、松江市内中原にある内中原小学校であり、明治二十二年三月に同校を卒業していたことが事実となった。これまで、叙勲に当たって日米協会が作成した調査をもとに、明治二十三年三月に尋常小学校を卒業したと考えられていたから、一年早まったことになる。そのため市郎は数え一歳で小学校を卒業した。この卒業名簿によれば、当時は、入学する年齢など決まっていなかったようで、市郎より一〜二歳速い生まれの生徒が多い。

また同卒業名簿には、明治二十七年三月の卒業生に「堀キク子」の名があり、彼女の生年月日は明治一六年一二月生まれとある。卒業後の進路は「家事」と記している。企画展図録『松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる』三四頁八〇番の写真(松江の旭写真館にて撮影)に写る二人の女性のうち、右側が堀登久子であり、右側が登久子の姉「キク子」ではないかと思われる。堀家は「キク子」が一七歳位の時亡くなったと伝わるので、この写真は明治三三年かその少し前に撮影されたものとなる。

【2】小泉八雲との交流——上京を決意しアメリカ事情を学ぶ——

企画展終了後、堀市郎と小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)との交流の実態が明らかとなった。その詳細は、西島が山陰中央新報文化欄(二〇一二年五月一八日付、一二面)に寄稿した。新聞では出典など省略せざるを得なかった部分もあるため、左に加筆した文章を載せる。

松江出身の青年写真師・堀市郎の上京と小泉八雲

大正時代、「ブロードウェイで上演される役者のポスターがミスター堀のものでなかったら一流でない」と言われ、東郷平八郎、新渡戸稲造、野口英世、後藤新平など政府要人も数多く撮影した松江出身の写真家・堀市郎（一八七九—一九六九）の業績が、最近明らかになってきた。このニューヨークで成功した写真家・堀市郎が、なぜ上京後に渡米するに至るのか、その謎を解くカギが小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、一八五〇—一九〇四）の手紙の中にある。

明治三〇年（一八九七）、東京牛込にいた八雲が、七月二〇日付で二か月前に島根尋常中学校から静岡県の浜松尋常中学校へ転勤していた田村（旧姓浅井）豊久へ宛てた手紙に、堀市郎と思われる青年写真師が登場する（『小泉八雲全集』第十一巻、書簡集三（第一書房、一九二六年）、三二二頁、原文英語、落合貞三郎訳「田村豊久に二」）。

「親愛なる浅井君（田村豊久）——

……君が東京へ移つてきて、私達の近くに住むことになったら、さぞ私達は欣ぶだらう。いつかさうなることもあると思ふ。私は有力な理由があつて、非常に孤独な生活をしてゐて、訪問者は殆どない。現今士官学校にゐる仕官候補生の藤崎は、私が昔好きであつた生徒の一人で、日曜に折々やつてくる。美保ヶ関で私達と一緒にゐた青年写真師も、折々遊びにくる——彼は今、江木写真店へ入つて研究中だ。」

上京した八雲が、ある理由により、ほとんど訪問者のいない「非常に孤独な生活」をしていたなか、藤崎八三郎がやつてきた。さらに名前こそ出さないが、島根県的美保関で八雲と同行した青年写真師も八雲宅へ

遊びにきた。この青年写真師は、東京の江木写真店で写真の研究中だと八雲は認めている。江木写真店で働いていた写真師は、当時一八歳の堀市郎である。このことは、八雲の子一雄が記した「父「八雲」を憶う」（小泉節子・小泉一雄『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』恒文社、一九七六年、一七九—一八〇頁）に載る、八雲が東京富久町にいた頃（明治二九〇三五年）の記事からも明らかである。

「写真師堀^市一郎の如きも——親戚ではありませんが——牛込富久町へ私の父（小泉八雲）を頼つて出て来た出雲の書生さん中の一人です。」

堀市郎が当時、「写真師」として活動し、かつ八雲を頼つて上京してきた「書生」だったことも判る。

八雲の手紙にある「美保ヶ関で私達と一緒にゐた」という件は、前年（明治二九）、神戸クロニクル社に勤めていた八雲が、六月二六日に家族と共に神戸を発ち、松江、美保関、出雲大社を再訪し、八月二三日に神戸へ戻った時のことを指す。美保関へは、家族三人で七月一日に松江の大橋埠頭から汽船で美保関へ向かった。島屋旅館に滞在し、八月七日に松江に戻った。美保関滞在中、八雲は水泳や美保神社の祭りを楽しんだ。この美保関へ市郎は同行したのである。八雲が記す様に青年写真師として同行したものと考えられる。

八雲が最初に松江を訪れたのは、明治三三年である。この年、市郎は、八雲が最前にしていた松江殿町の写真師・森田禮造の許で修行中であつた。そのため、両者は早い段階で見知っていたのであろう。

気になるのは、市郎の上京前後に八雲が登場することである。八雲は美保関を訪れた際、『ジャパン・ウィークリー・メール』紙へ、東京帝国大学奉職の報道は時期尚早だと抗議しており、この時、ほぼ東京へ行く

ことが決まっていた。その後、正式に決定し、八雲は九月七日に上京する。市郎は、五か月後の明治三〇年一月に松江から上京を果たす。その行程は、叔父のいる飯石郡赤名から広島を経由するものだった（生前、市郎が堀昭夫氏に語ったという）。小泉一雄が八雲を頼り上京したと書いている様に、美保関で八雲に同行したことが、市郎の上京への決意を促すきっかけになったと考えられる。

さらに八雲の手紙から、市郎は上京後すぐに江木写真店に勤めだしていることも判明する。一万円札に載る福沢諭吉は同店で撮影された。全国でも指折りの写真館である江木写真店に就職できたのは、恐らく松江の森田禮造の推薦なり口利きがあったからであろう。いずれにしても、市郎が写真研究のため上京し研鑽を積んでいたことは確かである。

市郎は上京の四年後、単身、写真研究のため渡米する。写真の本場アメリカへの夢は、アメリカでジャーナリストとして活躍した八雲との交流から、実現可能なものとして映ったに違いない。八雲との出会いは、市郎にとって上京への決意と、その向こうにあるアメリカという国の情報を得るきっかけとなったと考えられるのである。

【3】明治三〇年一月に一八歳の堀市郎が上京したルート

著書執筆時には判っていなかったが、市郎が堀昭夫氏に語ったこととして、市郎の上京は、親戚がいるからとの理由で、赤名（島根県飯石郡飯南町）へ向かったという。赤名には市郎の叔父の三谷鍊二郎がいたので、叔父の家を頼り宿泊し、広島経由で関西へ向かった（二〇一二年四月二十七日、堀昭夫氏からの聞き取り）。

【4】渡米時の船中の市郎——日本丸に同船した鈴木春の証言から——

市郎は明治三四年（一九〇一）一月二三日に横浜港を出航し、日本丸に乗船して二月八日にアメリカのサンフランシスコ港へ入航した。この時、同じ日本丸に同船した鈴木春の自伝「立琴（私の半生）」（内藤多喜雄編『鈴木春遺構と追想』私家版、一九八〇年収載、初出一九七二年。本書の存在は新井涼子氏の教示による。）には、この時の航海の様子が詳細に記されている。市郎についても記述していて、渡航の状況を窺うことができるため、関連部分を紹介する。

苦しい航海で得たもの

米国留学時代③

みじめな三等船客

日本丸は三千トン級の商船で、当時としては、わが国有数の商船であったが、三等船客の待遇は、移民というレッテルもあって、まことにみじめなものであった。航海中の差別待遇の苦しみは今でも忘れられない。例えば検疫にしても、一等客船には何の手続きも要求されなかったが、三等客船には、強制的であった。横浜港といっても、現在とは全く違い、棧橋はおろか防波堤も未だなく、港とは名ばかりで、私たちは浪打ちぎわの露天に四方荒むしろに囲われた硫黄風呂に入浴させられるという原始的検疫であった。これが終ると数隻の伝馬船に数名づつ下等船客を、五、六百メートルの沖合に碇泊している本船に運んでくれる。

見送りの弟も同船して、舷側にかかる綱梯子をよじ登って乗船したが、船室は、甲板のハッチを降りた船艙である。天井は低く、何となく牢獄の感があった。私の案内された場所は左舷の円い小窓近くの、白木の二

本の角材で支えられた幅六、七十センチの帆布でつくられた吊り床であった。

薄暗い電灯、鉄板の冷たさ、特有の船臭とが重なって、なれない私たちには不快感を生ぜしめた。見送りにきた弟は帰宅後「兄さんはかわいそうだ」と洩らしたとのことであるが、実感であったと思う。

冬の真つ最中で、太平洋の荒れる季節である。とくに北東に流れる黒潮が北のアリューシャン群島から吹く逆風にぶつつかり、一層海は波が高く荒れるのである。横浜港出帆の夜からホノルル港着の七日七夜は難航で、船酔いが続出し、時刻になると枕元に運んでくれる日本食弁当は、案外おいしそうではあるが、食べる者は殆んどなく、強いて食すれば直ちに吐き戻す始末で、その一週間私は弟が贈ってくれた蜜柑一箱を頼りに、わずかに食欲をみただけであった。

耳の奥にひびく讚美歌

そのために心身もうろうとなり、極度に衰弱した体をぐったり横たえていたある夜、船艙の小窓に打ちつける波の音にふと目をさますと、讚美歌が耳の奥に響いてきた。それは三二番の「いつくしみふかき、友なるイエスは！」であった。

今こそ暗い船艙の片隅で、家庭を離れ、遠い異国への門出に当り、連日連夜の船酔いの苦しみに外遊の雄志も打ち砕かれようとしているときに、この讚美歌の声。その瞬間、私は感謝と感激の涙を止めることができなかつた。同時に今までのなまぬい信仰、マンネリズムに陥りやすかつた教会生活を思い返して、身のひきしまるのを感じた。

異郷の土に上陸第一歩

堀樫山・市郎父子に関する新知見（西島）

米国留学時代④

堀市郎との出会い

やがてホノルル港到着の日も近づいて、太平洋上の風波もようやくおさまり始めるとともに、朝日が波の上に照りそめる頃、船艙のハッチを、やつとの思いでよじ登り、一卷の聖書をもって甲板上の一隅に座して、聖言の数かずを読みふける日びをくり返していた。早朝のことゆえ、乗客の誰もが私に気づくはずもなかつたと思っていたが、この私の毎朝の聖書読みが、はからずも後年、一人の乗客をキリスト信仰に導く動機となった。このことは、その時より教えて四十年以上も経過した後のことであるが、私たちの思いにあまる神のみわざが、私たちの知らぬ間に働いているのを痛感したのである。

この一人の乗客とは、同じ三等クラスの堀市郎その人であった。堀は私より一歳年長で郷里出雲松江市を出て、渡米前に上京し、当時ほとんど唯一軒しかなかった東京の鈴木真一写真館に身を寄せ、見習い徒弟となっていた。小学校を出ただけで、英語知識も十分でない彼は、写真技術研究のために二十一歳で渡米を志したのである。

彼も三等船客であったが、一等船客に彼の知人があるというので、航海中はほとんど毎日、夜になると一等キャビンに居を移していた。ホノルル港に寄港すると、ゆうゆうと上陸して観光の楽しみを味わい、三等スチレージに閉じこめられていた私に、楽しかつた見物の話をしてくれるのであった。

右の文章からは、市郎も乗船した日本丸の三等客船のみじめな状況と、英語の知識も不十分であるにもかかわらず、「写真技術研究」のために渡米を志

したことが明らかとなる。また渡米前、東京で「鈴木真一写真館」で「見習い徒弟」となっていたとする。鈴木真一（一八三五―一九一八）は幕末から大正時代にかけての写真家で下岡蓮杖に学び、明治六年に横浜で写真館を開業して、同一三年に東京九段坂に支店を開いた人物である。ただ、市郎は小泉八雲の手紙や佐々木節子氏の証言にあるように、江木写真館に勤めていたから、この部分は鈴木春の記憶違いかもしれない。もしくは「見習い徒弟」と記しているのだ。市郎が一時期、江木写真館に勤める前に、鈴木真一写真館に勤めていた可能性もあるが不明である。市郎は、日本丸のなかで、知人を頼り、三等客船から一等客船に移り、寄港地ホノルルでは「ゆうゆうと上陸して観光の楽しみを味わ」っていた状況が窺える。

【5】セントルイスの市郎

市郎は三年余のサンフランシスコ滞在後、ミズーリ州東部のセントルイスで一年過ごす。これは一九〇四年四月から十一月まで開催された万国博覧会に併せての行動で、万博の日の丸を描いたことは拙著でも紹介した。この時、万国博覧会事務局にいた鈴木春と市郎は出会っている、鈴木自伝「立琴（私の半生）」（『鈴木春 遺構と追想』）は次のように記す。

万国博で結ばれた友情

米国留学時代⑭

堀市郎氏の入信

セントルイス市唯一の日本料理店「生稻」で、偶然五年前渡米の際、日本丸船上でいっしょだった堀市郎氏と再会した。それから五年、十年の期間を距て予期しない再々会をくり返したが、彼は第二次世界大戦

勃発の翌年昭和十七年に四十年にわたる米国在留生活を終えて帰朝した。彼は日本丸の甲板で私が毎朝聖書を読んでいたのを記憶していて、聖書に関心をもち、その後キリスト者となって、現川崎市の独立教会創立の貢献者となった。

市郎が日本に帰国するのは一九三〇年（昭和五）なので、帰国の時期は明らかに鈴木春の記憶違いではあるが、渡米時に鈴木が日本丸船上で聖書を読んでいたことが、市郎の関心を引き、後に市郎のキリスト教入信へと繋がったことがわかる。なお鈴木春の遺稿集『鈴木春 遺構と追想』の口絵八頁に掲載の「ニューヨークにて 第一回米貨東邦電力債発行（1925年 45歳）」とキャプションを付す鈴木春氏の肖像写真は、市郎撮影の肖像写真によくみられる特徴を備えており、撮影時期からも市郎撮影の写真と思われる。

【6】ニューヨーク居住後、ミドルネーム「ESSNI」を使用する

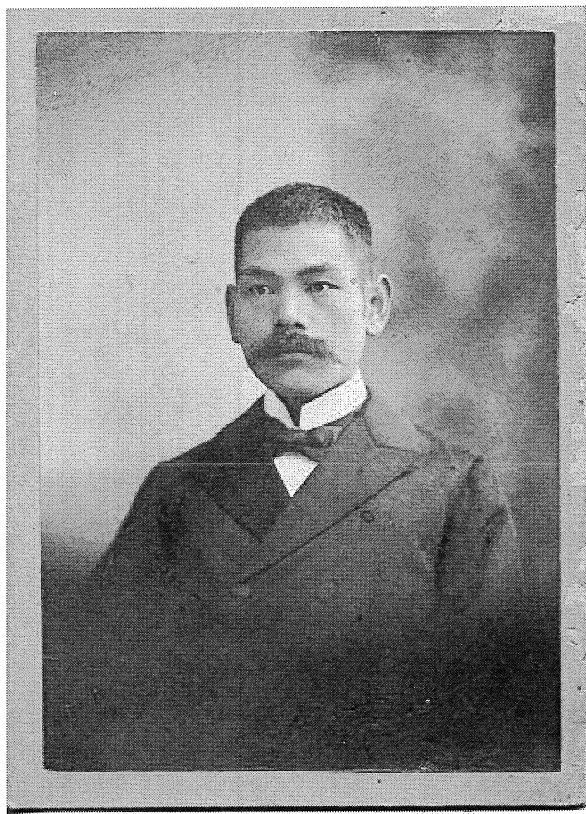
アメリカの住所録サイト Ancestry.com G[U.S. City Directories, 1821―1989]によれば、アメリカ・ミズーリ州のセントルイスの一九〇四年の住所録に、「Hori Ichiro photo r 3319 Lucas av」がある。同書に、職業は「photo」即ち写真家と記す。市郎は一九〇四年の段階で、セントルイスのルーカスアベニュー三三一九番地に、写真家として住んでいたことが判る。この時はまだミドルネームがなく、これ以前の一九〇一年のアメリカ入国記録にもミドルネームは記されていない。ミドルネーム「ESSNI」を使用したのは、ニューヨークに移ってからと考えられる。また一九〇六年のセントルイスの住所録にも市郎の名が同番地にあり、市郎が一九〇四年の万国博覧会の翌年、ニューヨークへ向かったとされていたが、一九〇六年までいたことが分かる

(新井涼子氏に情報提供を受けた)。

なお、アメリカ在任期、漢字では「堀一郎」と表記しており、写真台紙やアメリカ在任期に日本に送り掲載された『アサヒグラフ』の掲載作品等に使用している。恐らく、市郎より一郎の方が、市場の市より一番を表す一と説明する方が海外では説明がしやすかったためであろう。

【7】初期の堀市郎撮影肖像写真

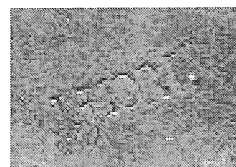
展覧会終了後、新たに発見された市郎の写真である(佐野好作氏所蔵)。右下に「I. HORI」と陰刻があり、まだミドルネーム(ESSNI)を使用しておらず、ニューヨーク時代にはない字体である。市郎は残存史料を見る限り、ニューヨークにきてからミドルネームを使用したと考えられるため、本写真はニューヨークへ来る一九〇五年以前の写真と思われる。市郎の写真技



堀樺山・市郎父子に関する新知見(西島)

術が確立されるまでの初期の肖像写真として貴重である。

↑右下に陰刻されたサイン「I. HORI」。「H」字の左下が伸びるのが特徴。



【8】一九二五年(大正一四)の日本における展覧会

大正一四年一月一七日付『山陰新聞』(三三三三)面。今の「山陰中央新報」に、「アメリカ人を驚かした／ダンサーの芸術写真／紐育の人気男堀さん(松江出身)の傑作／三都で鑑賞展覧会を開く」の見出しで堀市郎の活躍について記事が掲載された。文面は左の通り(旧字体を便宜改め、振り仮名は割愛し、句読点を加えた)。

日本の生める世界的芸術写真家として、目下ニューヨークに在住してゐる堀一郎氏から、同氏の傑作百余点を、最近、氏と親交ある名古屋陶器会社重役森村茂樹氏のもとへ送致して来たが、それは堀氏の新しい試みとして、アメリカの専門家を驚かせた国際的ダンサーの二々の型を芸術写真化したもので、中にはアンナパウロワあり、セントデニスあり、ホキネあり、何れも彼地の好事家がすむぜん措くあたはざる逸品揃ひで、日本には珍らしい芸術品だといふので、森村氏は東西の大家と相談の上、近く東京、大阪の両所で展覧会を開くこととなり、それに先立つて名古屋でも、その珍らしい堀氏の芸術品鑑賞展覧会を二十、二十一両日、市内瓦町のキリスト教青年会館で開催するはずである。右につき森村茂樹氏は語る。

堀氏はいまアメリカで一流の芸術写真家として認められてをります。私が洋行してニューヨークに滞在してゐた昨年あたり、氏の名声は実に錚々たるもので、東洋の絵画趣味をダンサーの芸術写真にして好評を博し、師のブラドリー氏を凌駕する程の勢でした。そして芸術写真の外、洋画家としても有名で、大正三年以来、度々ナショナル、アカデミー、エクスヘビシヨンに入選し、アメリカ芸術界の人気男として、一般紳士淑女間にもはやされてゐます。堀一郎氏は松江市の生れで、明治三十四年美術研究のため渡米、今日に及んでゐるのであると。

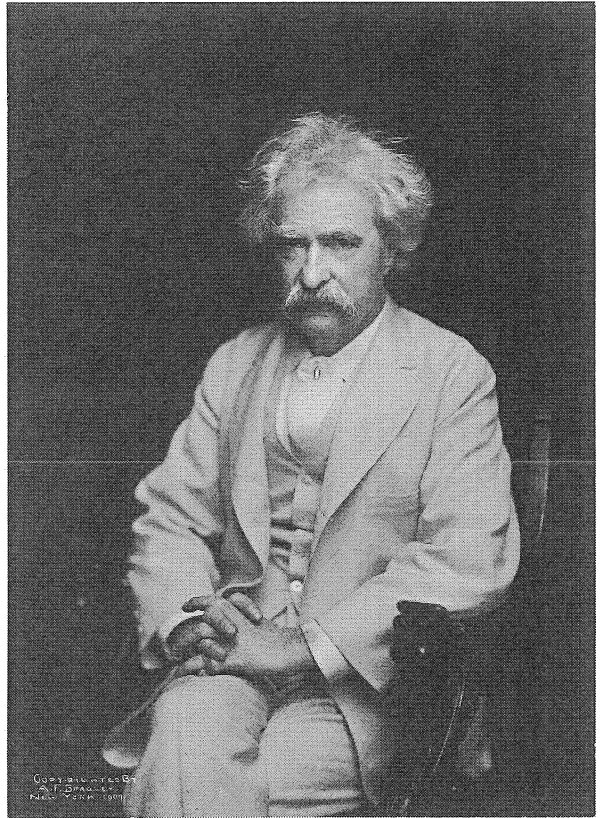
右記事からは次の点が明らかとなる。①大正一四年に日本で展覧会があったこと。②森村茂樹氏は大正七年一月二四日〜同一年二月二六日まで日本陶器株式会社取締役を務めた人物である（ノリタケ一〇〇年史編纂委員会編『ノリタケ一〇〇年史』株式会社ノリタケカンパニーリミテド刊、二〇〇五年。資料編「役員任期一覧」）。③セントデニス、ホキネの写真もある。④大正一四年時、市郎はアメリカでも一流の芸術写真家として認められていた。⑤大正一三年にとくに名声が高まった。⑥師匠がブラドリー氏であることが確実となること。また師を凌駕するほどの実力があつた。⑦大正三年以来洋画を展覧会に出展したこと。⑧「アメリカ芸術界の人気男」だということ等である。堀市郎を知る同時代証言として貴重である。

大正一三年にとくに名声が高まったとの指摘は、帰国する昭和四年までの約五年間（一九二四―二九）が最も市郎の名声を博した時期であつたことを示す点でも興味深い。

【6】ニューヨークでの堀市郎の写真の師匠は、小説家マーク・トウエインを撮影したブラドリー氏

先の新聞記事から、市郎のニューヨークにおける写真の師匠がブラドリー氏であることが明らかとなつた。ブラドリー氏は、ニューヨーク五番街にスタジオを持つ、世界で最も成功したスタジオ・カメラマンの一人である。アメリカの小説家で『トム・ソーヤーの冒険』の著者であるマーク・トウエイン (Mark Twain。一八三一―一九一〇) の最も有名な肖像写真を撮影したことも有名である。

前頁の写真は、佐野好作氏所蔵の堀市郎関係写真資料の一枚である。一枚目が表、二枚目が裏で、裏には堀市郎の直筆で「小説家 マーク トゥレイン先生」とある。表左下には「COPYRIGHTED BY/A. F. BRADLY /NEW YORK. 1907.」と写し込まれている。ブラドリーが小説家マーク・トウエインを撮影したものである。当初、市郎の写真一二〇枚とともにこの写真が一緒にあることの意味が解らなかつたが、市郎のニューヨークでの師匠がブラドリーであることがわかり、市郎がこの写真を持っている理由が分つた。市郎は一九〇五年から独立して写真館を開業する一九一二年まで、ニューヨークのブラドリー写真館の技師を勤めていた。この写真は、一九〇七年の撮影であり、市郎が技師を勤めていた時期のものである。マーク・トウエインを語るときに良く使われるこのポートレートは、師匠のブラドリー撮影であるが、技師として市郎も関わっていたのであろう。また、この写真にみるように、背景が比較的すっきりしている写真の特徴から、市郎撮影の写真の特徴とも似ていて、肖像写真の撮影技法が、師匠のブラドリーの影響を強く受けていることもわかる。



表

【10】堀市郎撮影による高峰譲吉及び野口英世（一九二〇年二月）

堀市郎撮影写真が発見された報道が、ジャパン・タイムスや共同通信、産経新聞英語版、山陰中央新報英語版などで、インターネット掲載されたことから、海外からも反応があった。アメリカのコロラド州に住むウイルス学者である久野五郎氏（理学博士）から、一九二〇年にニューヨークを訪ねてきたメキシコ人二人と高峰譲吉・野口英世四人を写した写真があることを教示いただいた。久野氏によれば、この写真は、二〇年以上前に、技術指導で訪問したメキシコのメリダ市の「野口英世記念研究所」の所長室の壁に掛けられていたもので、久野氏が壁に架かっていた写真を撮影されたものという。

上部が切れているのが惜しまれるが、確かに堀市郎写真館のロゴマークの入った台紙であり、右端に野口英世、左端に高峰譲吉が写っている。久野氏は詳細にこの写真の撮影された背景等を分析されている。写真に野口英世が書いたスペイン語での筆記について、久野氏は、「Reuerdo afectuoso de la visita del doctor Perrin y del doctor Vasconcelos al centro japonés—19 de diciembre. Hideo Noguchi 1920」と読めるとし、「Perrin 及び Vasconcelos 博士のニューヨークの日本人街訪問の時の楽しい思い出 一九二〇年十二月十九日 野口英世」と翻訳する。

この写真撮影に到る背景を久野氏は、次の様に説明する。一九二〇年（大正九）一月にロックフェラー財団は、黄熱病調査団をメキシコに派遣し、オブレゴン大統領と会見して、財団とメキシコ政府との共同体制で黄熱病調査対策本部を設置する交渉が始まった。結果は、ロックフェラー財団の T. C. Lyster が黄熱病対策本部長となり、副部長にはメキシコ人でメキシコ政府の保健衛生部の疫病行政関係の役人 Dr. Angel Brisco Vasconcelos（免疫専門）がなることに決まった。ロックフェラー財団は「Dr. Vasconcelos」と

小説
大塚
ゴードン
トレンジャー

裏



スペイン生まれでメキシコに移住し、国立メキシコ大学医学部組織学教授である Dr. Tomas G. Perrin (微生物学者) をニューヨークへ招聘した。そして二月一九日にロックフェラー財団の野口英世が、高峰譲吉と、Dr. Vasconcelos、Dr. Perrin の四人で会食し、翌年(一九二一)一月にロックフェラー財団とオブレゴン大統領が、黄熱病対策本部設立の合意書に署名して、対策本部は正式に発足した。

久野氏は、野口英世のすぐ右隣に座っているのが Dr. Vasconcelos で、高峰譲吉の左隣に座っているのが、Dr. Vasconcelos より少し若く見える Dr. Perrin と推定している。ただ、写真を注意深くみると、手前にもう一膳あり、ワイングラスもあることから、この写真の撮影者である堀市郎も会食に参加していたのではないかと思われる。四人での会食ではなく、はじめから写真を撮ることを前提で、野口英世の親友でもある写真家堀市郎も呼んだ五人での会食だったのではないだろうか。

【11】 展覧会開催後、新たに判明した堀市郎撮影写真の人物たち

① 新渡戸稲造 (一八六二—一九三三) 『武士道』の著者で、旧五千円札に



なった人。一九一九—二六(大正八—昭和一) 国連事務次長(国際連盟書記局事務局次長)として活躍していた頃の写真。今回初めて、堀市郎撮影であることが判明した。東京女子大学HPに載る写真と同じで、同大学に確認を取った(図録付録 no. 19)。

② アレクシス・カレル (一八七三—一九四四) フランスの外科医、生物学者。一九二二年にノーベル生理学・医学賞を受賞した。野口英世記念会の



の小松山六郎氏の指摘による。野口英世とカレルと一緒に写った別カットの堀市郎撮影肖像写真があり(図録二六頁掲載)、また服装が同じであることからこの時、単体で撮影したものと判断される。撮影時期は大正七年(一九一八)二月二十五日(図録付録 no. 44)。

③ 秦佐八郎 (はた・さはちろう)。一八七三—一九三八) 島根県益田市出身の細菌学者。医学博士。梅毒の特効薬を開発。一九二三年(大正一二)二月



に、アメリカ・ロックフェラー財団の招きでアメリカとカナダの医事衛生視察に訪れているので、この時撮影の可能性が高い。野口英世記念館館長による教示(図録付録 no. 52)。

④ 齋藤博 (さいとう・ひろし)。一八八六—一九三九) 日本の外交官。一九二三年(大正一二)一二月にニューヨーク領事となる。一九三〇年(昭和五)

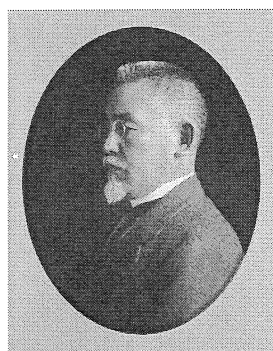


ロンドン軍縮会議の主席全権であった若槻礼次郎(松江出身)の通訳を務めた。一九三四年(昭和九)四九歳の若さで駐米大使となった。新井涼子氏の指摘の後、他の齋藤博の写真と突き合わせ判断した(図録付録 no. 53)。

⑤ 原田武一 (はらだ・たけいち)。一八九九—一九七八) 日本テニス界のバネリア清水善造(肖像写真は堀市郎撮影)に続く、日本を代表するテニスプレーヤー。全米ランキング三位(一九二六年)、世界ランキング七位の実績



をもつ。その容姿から、海外の女性ファンを多く獲得した。日本テニス協会に問い合わせ確認した。小林公子著『フォレストヒルズを翔けた男—テニスの風雲児—原田武一物語』(朝日新聞社、二〇〇〇年)のカバー見返しに載る武一の写真は、その作風から、今回新たに判明した佐野好作氏所蔵原田武一肖像写真の角度違いで、同じ時に堀市郎が撮影したものの可能性が高い。小林氏によれば、朝日新聞社が用意した写真とのことである(図録付録 no. 78)。



⑥ 後藤新平 (ごとう・しんぺい)。一八五七—一九二九) 明治から昭和初期にかけての官僚・政治家。関東大震災跡、内務大臣と帝都復興院総裁を兼務し、帝都の復興に努めた。この写真は、一九一九年(大正八)に欧米外遊でニューヨークへ立ち寄った時の写真である岩手県奥州市の新渡戸稲造記念館に問い合わせ確定した。メガネ・服装が、同記念館が所蔵する「紐育にて撮影」と記した別カットの新渡戸稲造肖像写真と同じであることが根拠。同館所蔵の稲造肖像写真も堀市郎撮影の可能性

がある。(図録付録 no. 68)。

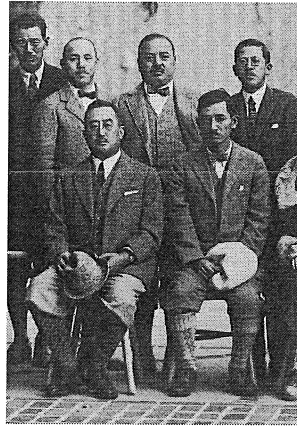
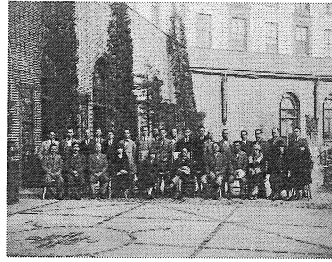
⑦ 牧野伸頭 (まきの・のぶあき)。一八六一—一九四九) 大久保利通の次男で、牧野家へ養子に入った。日本の政治家。一九一九年のパリ講和会議では、次席全権大使として参加し人種的差別撤廃の提案を行っている。その後、宮内大臣、内大臣を務めた。(図録付録 no. 49)の左側の人物。牧野は、一九一九年のパリ講和会議出席時、ニューヨーク経由でパリへ行っており(ニュ



—ヨーク発一月一七日にイギリスリバプール着)、この時の可能性がある。

⑧松平恒雄(まつだいら・つねお 一八七七一—一九四九) 松平容保の四男。

駐米・駐英大使。(図録 no. 113) 集合写真の前列中央二人の右側の人物。一九二四年一月〜二八年七月、ワシントンの駐米大使だった『松平恒雄追想録』故松平恒雄氏追憶会、一九六一年所収「松平恒雄年譜」。その右側は、斉藤博の可能性がある。



左前が松平恒雄

⑨朝香宮鳩彦王・允子妃(あさかのみや・やすひこおう 一八八七一—一九八

一、のぶこひ 一八九一—一九三三) 鳩彦王は朝香宮家の初代当主で、皇族であり軍人であった。一九二二年にフランスへ留学。その後、陸軍中将・近衛師団長・軍事参議官を歴任した。(図録 no. 113) 集合写真の前列中央二人(⑧上写真)。「堀市郎・前田寅次作品展」(白山真理・栗村恵美編。JCHIF オトサロン刊、二〇一二年一月、二頁)で紹介している。新井涼子氏の調

査では、和歌山市民図書館の移民資料室で「羅府新報」の記事や Ancestry.com から、撮影は一九二五年一月という。

⑩新井領一郎(あらい・りょういちろう 一八五五—一九三九) 日本の実業



ル・松方・ライシャワーが著した領一郎の伝記『絹と武士』(広中和歌子訳、文藝春秋、一九八七年)掲載の写真からも、領一郎と田鶴夫人が手前の二人であることが判る。後ろの二人は、領一郎の長男米男・盈(みつ)夫妻、手前がその長男・領と推察される。

また、領一郎夫妻が判明したことで、⑧で示した集合写真(図録 no. 113)にも領一郎・田鶴夫妻がいることがわかる。前列左から三人目が領一郎、前列右から二人目が田鶴夫人である。

⑪チャールズ・マクベীগ(Charls MacVeagh 一八六〇—一九三二)



図録付録 no. 56 の人物は、一九二五〜二八年まで駐日アメリカ大使を勤めた外交官チャールズ・マクベীগと考えられる。新井涼子氏が「羅府新報」に角度を変えた写真が掲載されているのを見つけた。

⑫アリス・ルーズベルト (Alice Roosevelt 一八八四—一九八〇)



図録 no. 107 の女性は、テオドア・ルーズベルトの娘のアリスの可能性が高い(新井涼子氏の教示)。彼女がNYに在住したことや、他の彼女の写真はほとんどが横顔を写したものであること、それらの他の彼女の写真の顔とも良く似ているためであるが、ここでは可能性

のみを指摘しておく。

⑬早川雪洲 (はやかわ・せつしゅう 一八八六—一九七三) ハリウッドスタ



堀樺山・市郎父子に関する新知見(西島)

ー。二〇一二年一二月に新たに発見された写真。

佐野好作氏蔵。中央に早川雪洲が座り幕を持つ。右端が堀市郎である。市郎と雪洲の正面に座るのが鈴木春と思われる。幕には、「第二回／一辺倒会」□「一九五七 六 二四於高橋邸」と書かれているから、一九五七年六月二四日に高橋某邸にて開かれた二回目の「一辺倒会」だったことが判る。雪洲は七一歳、市郎は七

八歳。市郎は写真家を辞め、画家として横浜に暮らしていた時期で、雪洲は主演の映画「戦場にかける橋」が公開された年にあたる。なお一辺倒会については不明。

⑭杉本鉞子 (Etsu Inagaki Sugimoto エツ・イナガキ・スギモト 一八七三—一九五〇) 旧長岡藩家老の娘で渡米し、雑誌「アジア」に半自伝的小説「A daughter of the Samurai (武士の娘)」を連載し、一九二六年にニューヨークで単行本化されベストセラーとなった(Published 1926 by Doubleday, Page in Garden City, N.Y.。同書は、日本でも邦題『武士の娘』として、文庫化されている)。単行本の口絵は鉞子の立ち姿で、これを堀市郎が撮影した。同書内表紙に「Frontispiece by Ichiro Hori.」とある。

【12】ニューヨークから日本の写真雑誌『写真芸術』に寄稿した市郎の文章『写真芸術』一九二一年(大正一二)三月号(第三卷第三号、写真芸術社)にニューヨークから寄稿した堀市郎撮影の①「パヴロヴ夫人肖像」②オランダ、ダンス」③「鍵おどり」を掲載する(日本カメラ博物館 白山眞理氏の教示)。一方同紙による「編集余録」(三四頁)に、

◎本号の巻頭に在る堀一郎氏の印画は同氏が特に本誌の為遙々紐育から贈られたもので、当に珍品である。路草氏のお土産と共に公開する。

と記し、大正二二年時、写真雑誌の巻頭口絵三枚に掲載され、かつ「珍品」と日本で認識されるものであったことが判る。この号には、執筆者不明(恐らく編集者の安成三郎)ながら「堀一郎の事ども」と題する解説を載せているので次に示す(二九頁)。

堀一郎氏の事ども

本号口絵の最初の写真三葉は、ニューヨークの第五街にステューディオを持つてゐる、堀一郎氏の作になるものである。氏の作品が如何に優れてゐるかは見られる通りで、改めて言ふまでもない。氏が渡米したのは殆ど廿年も昔の事であつて、数年前黄金より土の方が貴いあのニューヨークにステューディオを開くに至るまでは、全く立志伝に書かるべき努力と苦心の寶物であつたに違ない。本誌上に時々「途上スケッチ」を発表する杉本萬吉氏と共に、ニューヨークの一名物になつてゐる。

最新の注意を要する写真に在つては、日本人の性質は非常に適してゐるのかも知れないが、兎に角氏は一流の写真家として認められ、雑誌Vogue 及びShadow Land に時々その作品を発表して、在米邦人の為に大いに気を吐いてゐる。氏が営業家として成功してゐるのは、単に写真が巧なばかりでなく、ニューヨーク・アカデミー・オヴ・デザインに入選した事のあるほど絵画に素養を有してゐる事もかなり大きな原因であらう。ミニアテューアー彫刻に深い趣味を持つてゐる事は、氏が如何に細心で芸術的素養の恵まれてゐるかを物語るものであるが、一面非常に快活で、日本人特有の陰鬱な点がない。その人の優れた絵画や彫刻がステューディオに飾られてゐる事は、クラシックや芸術に渴してゐる米国人にどれほど好意を抱かせるか、氏の上流の人達に愛されるのも当然な事であらう。

右記事からは、①大正二二年時、堀一郎（市郎）がニューヨークの「一名物」となつてゐたこと ②「一流の写真家」として人々に認められていて ③

雑誌Vogue や 映画・アート雑誌であるShadow Land にも作品を発表し、「在米邦人の為に大いに気を吐いて」いたこと④市郎が絵画やミニアテューア彫刻に素養を有していた点に「細心で芸術的素養に恵まれ」、写真の巧みさにも生かされていると評価していること ⑤「非常に快活で、日本人特有の陰鬱な点がない」のをその特徴として指摘し ⑥アメリカの上流の人達に愛されていること等が判る。



なお、口絵掲載の「オランダ、ダンス」は正面から踊る二人を捉えたものであるが、これを後ろからみた構図が、佐野好作氏所蔵の一枚と思われる（右上掲写真）。企画展図録No. 91に掲載した作品（図録では「踊る二人」と仮題をつけた）である。

【13】堀市郎が舞踏写真を撮る理由

写真雑誌『アサヒカメラ』一九二七年七月号（第四卷第一号、東京朝日新聞社・大阪朝日新聞社）の口絵に、第一回国際サロンに特別出展された作品「型の美 (A GAILETY FINGER)」(Bromide. 188×238mm.)、および刷込写真（五九頁）に「肖像」（タイトルは第四卷総目録より）を掲載し、併せて堀市郎が舞踏写真を撮るようになった理由を、「情緒と印象の靈感を求む——余の写真に就て——」と題し、自らが執筆している（日本カメラ博物館 白山真理氏の教示。左引用は旧字体を新字体に直した）。出展の経緯は次の「ニューヨークだより」により詳細が明らかとなる。

ニューヨークだより

国際サロン御開催につき当地地名の作家の作品を直送しました。アクトン印画紙の発明者ジェーコブソン氏を始めアーノルド・ゲンテ氏やルーマニア出身のボリス氏（当地第一流のアーティスト）及び当地邦人写真家堀一郎氏も作品提供を承諾しました。是等大家の作品は儘に国際サロンを飾るに足るものと思ひますから特別出品の御取扱ひを願ひます。同封した英文は堀一郎氏から送つて来たもので同氏の作品に関する説明、氏がどうして舞踊の写真を専門とするやうになつたかを一席弁じたもののやうです。取急ぎ御通知まで

四月十二日

ニューヨークにて

北野吉内

国際サロン開催にあたり、ニューヨークの北野吉内がアメリカでの有名写真家の写真出品に尽力し、堀市郎からも作品提供の承諾を得たこと、「大家」であるので、特別出品として扱つてほしいとサロン主催者に依頼したこと、市郎は英文で「情緒と印象の靈感を求む」を執筆したことが判る。市郎執筆の記事は次の様である。

情緒と印象の靈感を求む——余の写真に就て——

ニューヨーク 堀一郎

（堀市郎氏は在米国紐育の邦人写真家で同地に於ても第一流と称せられ近来名声噴々たるものがある。わが第一回国際写真サロンには特別出品されたが、その妙技讚嘆に價するものがあつた。即ち本誌口絵に収めたもの及び次頁の口絵は特別出品の一部である。

本文は特に寄稿された英文を訳したもので、氏の半生の写真芸術に対する感想である。）

私共は、長い物語りに於けるよりも、短い詩の中に屢々より真実な意思の表現を見出すことがある。写真は被写物の凡ゆる部分を示してはゐるが、表現の点から見ると殆ど貧弱で、殊に印象と「動き」に就て見るなら、絵画とは比較にならない程情けないことが多い。

自分は芸術を以て業とする家族の間に生れ数代の祖先は皆画家であつた。父レキザンは元來日本画家であつたが、時として、油絵若くは、水彩の肖像画をかけたこともあつた。

十二年から写真師たるの志を立て、六年間、地方の写真師の下で修行したが後東京に出でて、ある更に進んだ腕をもつ写真師に師事すること三年。次で千九百一年に渡米した。

自分が屢々見かけた写真の中には、或るものは、完全な自然の描写であり又あるものは自然を損ふやうなものもあつたが、要するに何れも、我々の眼に十分な満足を与へる底の作品ではなかつた。翻て絵画、特に日本画に就て之を見るに、彩管を揮ふこと僅に一、二度にして、画家が表現せんとするものゝ総てを現はし尽すことが出来る。

写真は我々の眼が自然の裡に認識するより以上に過多に自然を写し出す傾向を持つてゐる。自分は未だ一介の学生であつた頃、よく有名な芸術家と『写真は芸術であるか否か』に就て議論を闘はしたが、結局いつ

も議論の結着は『写真は芸術に非ず』と云ふ処に落ちて行つた。

然し、私の主張が弱いものではあつたけれども、私は右の結論に同意を表することは出来なかつた。実際その当時（千九百四年）の写真術は幼稚なもので凡ゆる点から見て絵画に比すべき程の写真は現はれてゐなかつた。

それ以来、写真界には異常の進歩があつたし、又将来写真が必ず一の芸術として認められる日の到来することも明白になつて来てゐる。

◇
自分は、従来の写真が、大体に於て、機械的に作り上げられたものであつて、一個の芸術品として作り上げられる余地が極めて僅少であつたことを見出した。

従つて従来の作品の中に、芸術品として認められるべき、個性のひらめきのある作品は、見る事が出来なかつたのである。

その間にあつて、自然物の複製に飽き足らず、それ以上の何物かを求めてやまなかつた人々は数へる程しかなかつた。

◇
自分が絵を習い始めたのは、どの点から見ても、写真を絵画の如くに写し得るやうにせねばならぬと思ひついたからである。

その後私は、細かい点までも、写真の裡に自分自身の思想を盛ることに努めた。その間私は小画像の製作を完成し、これをナショナル・アカデミー展覧会及びアメリカン・ミニエチュアー・ペインターズ・展覧会に出品した、その中の一つはカメラによつて撮影したもので『フォトグラフ』と呼ばれたものであつた。

芸術研究からち得た、発達せる頭脳を用ひて、独自の手法を持つ写真家が製作した写真は、必ずや真実で、表現的な所産となるであらう。

技巧的手法に於ては、そこに何の制限もあるべきものでないと私は考へる、如何なる手段、方法を採らうとも亦どんな用具によらうとも、結果さへよければ、これ等のことに關しては、何等問題はあるべき筈がない。

写真に於ける機械的方面の総てのものは、画家にとつての絵具や筆と同様に観らるべきものである。

◇
私は画面の裡に、情緒と印象の靈感とが躍動してゐるやうな写真を作り上げたいと思つてゐる。

◇
或る日のことであつた、私は日本美術品の鑑識家K君と共にメトロポリタン・オペラ劇場に行つた。そこで私共はニジンスキー一座のロシア舞踊を見物した。私の友人はこの踊りによつて何の感興もひかれなかつたが私自身の頭には閃光のやうに『これこそ、私が常々求め探してゐた材料であるのだ』と云う感がひらめいた。

◇
私は思つた 『これこそ人体の眞の詩的表現であり、人間美の驚嘆すべき律動である。写真を以てさへも、肖像として写し出すことが出来る。』

此の如き典雅が律動を持つ人体の何と美しいことよ』と。

◇
こゝで私は初めて、印象の靈感を伴ふ情緒と表現とを表はすやうな写真を作るには先づ第一に、適当な題材を見出すことが必要であると云ふことを悟つた。そして私は終に私の特殊な考へ方を完成するのに必要な

好題材を発見することが出来たのである。

右の文章は、市郎自身による自らの写真論であり、芸術論でもある。市郎がどのように写真というものを見ていて、写真に何を求めているのかが記されている。市郎の写真論として、重要な一文である。

この文章が執筆された一九二七年（昭和二年）は、市郎が五〇歳で帰国する二年前で、翌一九二八年の年賀状には「美術写真として独特の技能を認められ」たと記しているから（拙著『野口英世の親友堀市郎とその父櫟山』二〇三頁）、ほとんど写真修行に渡米してから美術写真としての自らの到達点に達した時期にあたる。編集子による前書にもあるように、市郎はニューヨークで「第一流」と言われ、名声も高かった。市郎の文章を見る。

市郎は画家の家系に生まれ、絵画をよく見てきたため、絵画と写真の違いをよく理解していた。写真は被写体のあらゆる部分を写し取るが、「印象」と「動き」という表現の面では絵画とは比較にならないくらい貧弱だと喝破する。人間の眼に「十分な満足」を与えられないという。これが、日本画だと絵筆を用いれば、画家が表現したいものは全てを表すことができるという。

この辺りの表現は、父櫟山を念頭に、祖父や父櫟山が描く日本画を幼い頃から見知った上で、人間の眼を満足させる表現の極致を日本画に見出しているものと考えられる。写真は絵画の様に被写体の主題を捉えるのではなく、写し撮るものが過多になりすぎると市郎はいう。そのため市郎が芸術家と「写真が芸術か否か」についての議論も、芸術とは言えないとの結論に達するのであるが、市郎自身は納得していなかった。

一二歳で写真師の志をもってから十四年、市郎がセントルイスにいた一九〇四年時の写真術は幼稚であると市郎は感じていた。幼稚な理由は、当時の

写真が機械的に写し込んだ「自然の複製」に過ぎなかったからで、写真を「芸術品として作り上げ」、「個性のひらめきのある作品」とする志向がほとんど写真師になかった。人間の眼に満足を与えるためには、絵画の様に主題を写し取らなければ、写真は芸術とならないと市郎は理解し、実践に移す。写真に細かい点にまで「自分自身の思想を盛ることに努め」と共に、絵を学び始める。これは絵画のように主題を捉える技術を会得するためであり、展覧会に細密画（ミニチュア）を出品し、批評を仰ぐこともあった。

絵画の手法に学んだ「芸術研究」に基づく、主題をどう表現するか考え抜いた「独自の手法を持つ写真家」による写真は、必ず「真実」であり、「表現的な所産」となるものであると市郎は確信する。そのためには、どんな手段を用いても構わないという。この点、市郎の写真は、背景がすっきりした、無駄なものが移りこんでいない、主題のみがはっきりと浮かび上がる作品となっており、市郎作品の特徴が、このような思想に裏打ちされたものであることがはっきりと判る。この事は、市郎が目指すものが、「画面の裡に、情緒と印象の靈感とが躍動してゐるやうな写真を作り上げたい」と明言している点に示されている。絵画の様に主題を明確に写し込む、無駄なものはない写真が目指されたのである。

市郎は、絵画にはあるが当時の写真にはない主題を求めて試行錯誤していた時期、ニジンスキー一座のロシア舞踊の踊りに出遭い、「人体の真の詩的表現」と、「人間美の驚嘆すべき律動」を見出すのである。

私は拙著『野口英世の親友堀市郎とその父櫟山』二〇〇頁で、市郎撮影の写真の特徴を、動きの瞬間を巧みに捉えることに長け、動きが感じられる点、肖像の中に邪魔者が一切入らず、非常にきれいで無駄がない点、画面内の空気がきれいで、背景がすっきりし、温かみを感じられるという点を指摘

したが、これらの特徴は、市郎自ら絵画に見られる主題のあり方を、写真のなかに取り込み、芸術として昇華させたところに見られる特徴だったのである。市郎の写真には、技術だけでなく、考え方にも写真を芸術に昇華させる論理をもって構成されていたのである。

【14】写真雑誌『アサヒカメラ』の表紙を飾る（一九二七年一〇月）

写真雑誌『アサヒカメラ』一九二七年一〇月号（第四卷第四号、東京朝日新聞社・大阪朝日新聞社）の表紙および口絵（三三五頁）にニューヨークから寄稿した堀市郎撮影の「習作（STUDY）」と題する作品を載せる（日本カメラ博物館 白山眞理氏の教示）。図録No. 99（四二頁）に掲載した作品（図録では「役者」と仮題をつけた）と同じものである（上掲は佐野好作氏所蔵写真より）。



【15】昭和二年の日本における堀市郎の評価（一九二七年一月）

写真雑誌『アサヒカメラ』一九二七年一月号（第四卷第五号、東京朝日新聞社・大阪朝日新聞社、五一―五二頁）に寄稿する永田龍雄氏の「微笑む姿態 濃艶な情緒——堀一郎、ホツペ両氏の傑作を見て——」と題する文章は、堀一郎帰国の二年前、市郎の写真技術・名声ともに円熟期を思わせる内容をもつので、ここに紹介する（また旧字体を新字体に改めた）。

微笑む姿態 濃艶な情緒——堀一郎、ホツペ両氏の傑作を見て

×

記者曰く―永田氏は舞踏研究家で、またその批評家として知られてゐる。本稿は去る十月一日より五日まで本社五階に陳列して好評を博した堀一郎氏作品を観ての感とホツペ氏作品の感想である。

×

ホツペ写真傑作集を見た。巻頭序文はまことにいゝ小論である。さすがに彼は芸術家である。――ホツペの名をわたしが始めて知つたのは、彼の『露西亜舞踏』の写真を愛蔵してからだ。もう十年前位にならう。

M男男爵の資生堂でやつたときの小展覧会にホツペのイエツの写真があつたが、たかいので実にはほしくてたまらなかつたがよしたことお覚えである。その後、丸善で彼の肖像画をかつてやつとはかない望みを達したものである。

M男爵がおなじく、こんど紐育の堀一郎君の作品展を大阪朝日でやつたことを、大阪から四五日前、遊びにきた舞踏家、榎茂都陸平君にきいたので見たいと思つてゐた。

（いゝ踊手の写真が大部分です、値がたかいので、手ができません）と、榎茂都君はこぼしてゐた。

その堀君の写真が東京朝日の五階のサロンにもどつてきて保管され、そして十月初旬に展覧されると言ふことを社内の人にきいて、飛びたつばかりにわたしはうれしかった。

その絵をわたしはS君にそつと見せてもらった。とにかく僕は写真には素人だが、堀君の舞踏写真はむかしからすきなで、現にアンナ・パヴロワの写真を所蔵してゐる。……

踊手の写真のなかにはわたしは始めて接する名前の踊手もある。

Prince Nyoka Inyota がそれだ、たぶん紐育に居られる印度王女のお

一人であらう、その印度舞踊と亜刺比亜舞踊の姿態はよくそのキマリをとらへて撮してあるのに感心した。

知らぬ名では Cha Weedman と言ふ男性踊手の写真がある、それから Jack と呼ぶ男性の踊手の写真も数多くあつたが、わたしはあまり知らぬ名である、しかし二人とも立派なよき姿態の所持者である。

いちばん明るくたのしんでとれてゐるのはパヴロフと来朝した踊手の Bartlatt と Baginsky の木靴を穿いた和蘭舞踊である。バジンスキイ君の人のいゝ顔がいまにも微笑をしてはなしかけるやうにとれてゐる。

フホキンと妻君のフホキナの写真もよいことにフホキナの胸から下のからだの長つぽそいそれでめて壮健にめぐまれた肢体がよくフホキナらしい匂ひをかもして撮されてゐる。肥り肉でそれで細く感じさせる彼女のからだだが、……それからこの女性の上向のあのこの線の美しさが雄弁に物語られてゐる。

Rosa Roland のサモア舞踊も美しい四肢を十分に描かせて居る、ローランドの写真はすべてすぐれて美しい。

Novikoff の顔は守田勘弥君に似てゐる。鼻つきは藤原義江君だ、抒情的な紅毛人には珍らしいをとなしい顔だ、ノヴィコフには亜米利加の舞台でわたしは逢つてゐる。

伊藤道郎君の六の踊もある。

フホキン夫妻のメデユウサの舞踊はよくその恐怖がしみだしてゐる、夫婦でうつしてゐるはうがよい。

パヴロフと一緒に来朝した Frieda 嬢のアントラ・ダンスはドリス・ハンフレー(デニスと一緒に来朝した)の葡萄の房をもつてたつてゐる清楚な姿態に対して、反蹠的なグロテスクな感じをだして成功してゐる。

Rooavara のをだやかな地蔵顔。……

印度王女ニヨタ・イニヨカの Vissens の美しい写しかたも忘れられぬ、——ことにフホキナの整つたあの白い脚。……

これら踊手の写真にまじつて、たつた一人ヒマラヤの雪のやうに白い鬚を垂れたラビンドナア・タゴール翁の顔が——たつた一人、ほりい写真だ、ほしい写真だ。

このほかデニスとパヴロフ夫人のがあつた。大阪で三枚うれて残つた九十七枚を、わたしは汗をふきふき、五階のサロンで眺めあかした。

右文章から、一九二七年(昭和二)九月以前に大阪朝日新聞社で堀市郎写真一〇〇枚の陳列があり、その後、一〇月一〜五日の五日間、東京朝日新聞社五階のサロンで、大阪で売れた三枚の写真を除いた九十七枚が展示されたことが判る。市郎はこの時ニューヨークにいたから、ニューヨークからの出展であつた。

出展された写真の被写体は次の様であつた。①アンナ・パヴロフとよく共演したロシアのバレエダンサーのイワン・ノヴィコフ (Ivan Novikoff, 一八九一—二〇〇二)。一九二三年にアメリカに移住した。②アンナ・パヴロフ Prince Nyoka Inyota (紐育在住印度王女か) ③Cla Weedman (男性踊手) ④Jack (男性踊手) ⑤Bartlatt と Baginsky の木靴を穿いた和蘭舞踊(写真芸術)口絵にある「オランダ、ダンス」もしくは佐野家所蔵の写真Ⅱ企画展図録No. 91のことだろう) ⑥フホキンと妻君のフホキナ(メデユウサの舞踊) ⑦Rosa Roland (ロサ・ローランド) ⑧伊藤道郎(いとう・みちお、一八九三—一九六二)の「六の踊」。伊藤はニューヨークのブロードウェイでミュージカルの振付を担当し、ダンサーとしても活躍した。⑨Frieda 嬢の

アントラ・ダンス ⑨ドリス・ハンフレイ (Doris Humphrey、一八九五—一九五八、アメリカのダンサー兼振付師) の葡萄の房をも持ち立っている清楚な姿 ⑩Roobavara ⑪印度王女ニヨタ・イニヨカ ⑫ラビンドナア・タゴール (インドの詩人、一八六一—一九四二) ⑬デニス ⑭パヴロワ夫人 (『写真芸術』の口絵にパヴロワ夫人肖像) が掲載されているそれであろう。

この他にも、市郎の写真は値段が高かったことや、執筆者の永田氏が市郎撮影のアンナ・パヴロワの写真を持っていることなど知ることができる。

【16】堀市郎執筆の三井弁蔵氏追悼文 (一九三一年)

三井榮子『三井弁蔵作品集』(私家版、一九三二年)に寄稿した、堀市郎の「偲ばれて」と題する文章がある。三井弁蔵は、三井物産社員として大正四年からニューヨークやロンドン等、海外で勤務の後、大正一〇年に帰国、家を継ぎ、のちに三井物産株式会社の取締役となった人物である。昭和一六年五月に五五歳で亡くなった。弁蔵夫人の榮子氏が刊行した、弁蔵筆絵画集で、これに絵画関係者が追悼文を載せている。堀市郎の寄稿文は以下の通りである(旧字体を新字体に改めた)。

偲ばれて

軽井沢の帰途にて

堀 市郎

軽井沢の野に 君が手植の百合の花

浅間をかざる花園と

来る人来る人 君の手植ぞほむる声

今は早や 散りて淋しき百合の葉も

浅間おろしの霧雨に

ぬれてぞ落ちる一しづく 君の手植ぞ忍ばるる

思出の 君の言葉は多けれど

浅間を画くカンヴァスは

今早や 君なき家に君を待つなり

君なき家に君を待つなり

軽井沢南ヶ丘新ゴルフ場は、実に故人の努力の結晶、氏の不朽のメモメントと見るべきである。此処に氏の愛着の念の存在するは言ふまでもない事で、最近氏は余生の楽しみを油画に求め、此の一大画面を眺め暮さんと、其の隣地にアトリエの建築に着手せられたのであるが、落成を見ずして此の世を去られたのである。

今、落成に近づきつゝある此の画房を見に来た私は、実に感慨無量である。故人对私の過去二十五年余の永き交りが、今更の如くニューヨークに、日本に、数々の思ひ出は次から次に思ひ浮ぶのである。何時も行けば喜び迎へられ、恰も御家族の一員の様に、夏来る毎に何時でも我家に帰る様な心安さで数日も氏の客となり、博学多趣味の氏と語る面白さに随分議論に花も咲かせ、吹き出す位が終りで何時も愉快であった。私も余暇あらば必ず訪れたのである。或時友人E氏に(真実に君の為めを思ふて心配してくれる人は、三井さん位なものだ)と言はれた事がある。今となりて殊更に氏を思ふ事の多き度毎に、感涙は制せられぬ次第である。人々の私語は―好い人だったね。―気の大きい。―惜しい人だった

ね。―まだ若いのに。―実にそれであつた。

我財界の一主人たる強大な輪廓の持主であるだけに、見出し得なかつた故人の眞の姿、氏は本性芸術家である。あの建造的なる遣り方、勇氣ある態度、屈せぬ氣力、何でも興味を以て事にあたる。そうして例のないあの性格、等がそれである。芸術家方面の基礎は、氏のロンドン時代に良師に就いて相当修業されし事ならん。殊に永く欧米滞在中に、美術館や展覧会又幾多の書籍を通じて、鑑識も素養も殊に記憶能き氏は十分に会得せられたのである。僅か数ヶ月で中止されたが、一晚で造上げると云はれた彫像、肖像としても決して素人ではない。鎌倉彫り等玄人を喜ばせる作品もある。ニューヨークでは油画を見に共に行つた事が度々あるが、何時も永く見て居られたには閉口したものだ。

故人の物故する二ケ年に足らぬ前より油画を始められたが、其の作品は数に於ても質に於ても驚くべきもので、今年と云はずとも、五年、せめて三年にても余生あらば、随分傑作も多きは勿論、我洋画にも多大なる貢献ありしものを。私情を云はしむれば、此の新築のアトリエにて、少時なりとも氏に喜びの筆を持たせてあげたかつた。

神は何故に彼に其の機を与へざりしや。

市郎の和歌調の詩は、父宗太郎の影響を受けていると考えられる。また、市郎が軽井沢の三井弁蔵の別荘に毎夏、何日も客として迎えられていたことが窺える。二五年余の弁蔵との付き合いというから、丁度、市郎がニューヨークで写真館を開き、弁蔵も三井物産社員としてニューヨークに滞在していた、大正一〇年頃からと見られる。ニューヨークで共に油絵を見に行つたとも語っている。

堀樫山・市郎父子に関する新知見（西島）

【17】福原信三の肖像を描く堀市郎

図録四八頁左下に掲載（佐野好作氏所蔵）。二〇一二年一月の JCI PHONO SALON「堀市郎・前田寅次作品展」で、堀市郎が描く人物は福田信三であることが確定された。福原信三（一八八三―一九四八）は資生堂の社長でありな



がら、一九二二年に月刊雑誌『写真芸術』を創刊し、日本写真界を牽引した人物である。一九〇八年に渡米しニューヨーク州のコロンビア大学に薬学を学び、卒業後もニューヨークで働いた。一九一二年にヨーロッパに渡り、その後、帰国した。信三の在ニューヨーク期は、堀市郎のブラドリー写真館技師期と重なる。その時の二人の接触は不明ながら、後に創刊直後の『写真芸術』に市郎が寄稿し（【12】参照）、親交があつた。

おわりに

堀樫山・市郎父子に関する資料は、今後も情熱をもって調査を続けることで、まだまだ明らかになることがあるであろう。特に、市郎撮影の肖像写真の被写体が誰なのか、市郎製作のミニユアチア（細密画）や市郎の描いた絵画については、ほとんど未解明と云つていい状態である。父樫山の松江での足跡は、多くを明らかにできたとはいえ、まだ多くの作品が眠っているであろうし、堀家所蔵の樫山関係資料（特に和歌や手紙等）は、一部を拙著で紹介したに過ぎない。樫山の弟・三谷鍊二郎の作品も多く現存しているが、未

調査である。これらの課題に一つひとつ応えられるよう、今後も調査を続けていきたい。堀櫛山の近代松江画壇に果たした功績や、市郎の日米の懸け橋として、日本写真界に果たした功績が評価される日がくることを願い、擲筆する。最後に、本稿を成すにあたって、写真の所蔵者佐野好作氏をはじめとする多くの人の御協力を得た。記して謝意を表したい。

(にしじま・たろう 松江歴史館学芸員)

松江歴史館 研究紀要

第3号

◆松江藩研究◆

城下町松江研究の現状と課題	西島 太郎	1
松平齊貴の上洛道中記録に見る旅の姿 ——「御上京一途」を参考として——	小山 祥子	27
松江藩儒黒澤石斎の研究（一）	西島 太郎	37
二人の甫庵 ——小瀬甫庵と山岡甫庵——	福井 将介	50
堀櫟山・市郎父子に関する新知見 ——展覧会開催後の調査より——	西島 太郎	73
資料紹介 安達家文書目録・翻刻（一）	新庄 正典	101
「三谷家住宅」調査報告書	足立 正智	130(31)
高野山奥の院に所在する堀尾家墓所について ——近世大名墓と堀尾家の宗教的背景——	西尾 克己 稲田 信 木下 誠	160(1)

◆博物館研究◆

松江歴史館整備事業で生じた問題とその整理 平成24年企画展	大塚 享義	122(39)
「松江藩士の息子画家になる。孫写真家になる。」展の記録と分析	西島 太郎	109

平成25年3月



松江歴史館

MATSUE HISTORY MUSEUM BULLETIN

No. 3 MARCH, 2013

CONTENTS

◆STUDY OF MATSUE CLAN IN THE EDO PERIOD◆

- Current Status and Issues of research MATSUE castle town----- NISHIJIMA Taro --- 1
- The figure of the trip seen to record the going-up-to-Kyoto trip
of the Matsudaira Naritake—Refer to a "Gojyoukyouitto" -----KOYAMA Sachiko--- 27
- Study of SEKISAI KUROSAWA is a Confucian scholar
of MATSUE clan vol.1 ----- NISHIJIMA Taro--- 37
- A research for "two persons ' Hoan (小瀬甫庵 and 山岡甫庵)" --- FUKUI Masayuki--- 50
- New knowledge about the father and son
REKIZAN and ICHIRO HORI-----NISHIJIMA Taro--- 73
- Document introduction : A list and reprint of the document
of ADACHI (安達家) vol.1 -----SINSYO Masanori--- 101
- Investigative report of MITANI house-----ADACHI Masanori--- 130 (31)
- Religious background of early modern times -----NISHIO Katsumi--- 160 (1)
- daimyo graves and the Horios
INATA Makoto
KINOSITA Makoto

◆MUSEUM STUDIES◆

- Problems and solutions associated with the construction of Matsue History Museum
-----OTSUKA Takayoshi--- 122 (39)
- Recording and analysis of the exhibition. "Become a photographer grandson.
Son to become a painter of Matsue samurai" on exhibition
----- NISHIJIMA Taro--- 109

Published by
Matsue History Museum
Matsue, Japan

平成二十五年（二〇一三）三月二十九日発行

松江歴史館研究紀要 第三号

編集・発行 松江歴史館

住所 島根県松江市殿町二七九番地

〒六九〇―〇八八七

電話 〇八五二―五五―一六〇七

FAX 〇八五二―三二―一六一一

